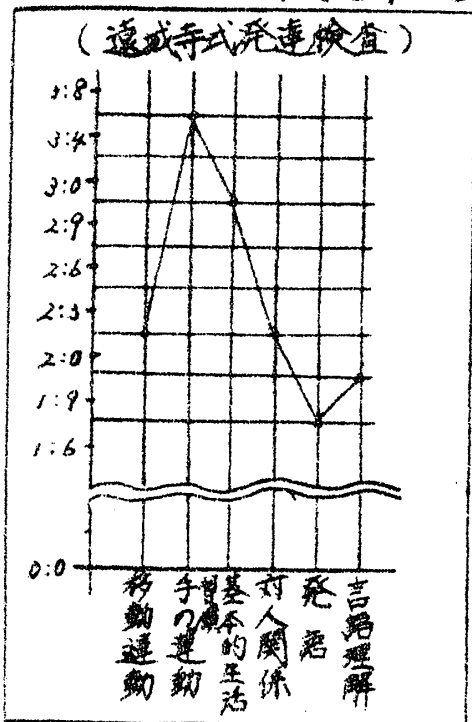


# 自分のことが自分でできる子をめざして 衣服の着脱指導を通して

徳田 純子

## 1 対象児の奥態

H・M(女) 昭和45年9月14日生 15才 中学部3年生  
てんかん大発作、左半身に軽度の麻痺あり。



〈諸能力について〉 遠城寺式発達検査にみる諸能力は左表の通りである。これを見ると、手の運動、基本的な生活習慣の能力が他の能力に比べて比較的高いが、これは、小学部段階からの継続的な指導による学習効果のあらわれと考えられる。しかし、比較的高い能力も3才程度であり、日常行動の様相と合わせてみても、本児の発達能力は、2~3才児程度と推定される。

〈基本的な生活習慣について〉 学校生活での多くの場面で介助が必要である。身

辺処理についても、自分一人ではできることは少なく、大なり小なり介助が必要である。その奥態は下表に示す通りである。

## 2. 主題設定について

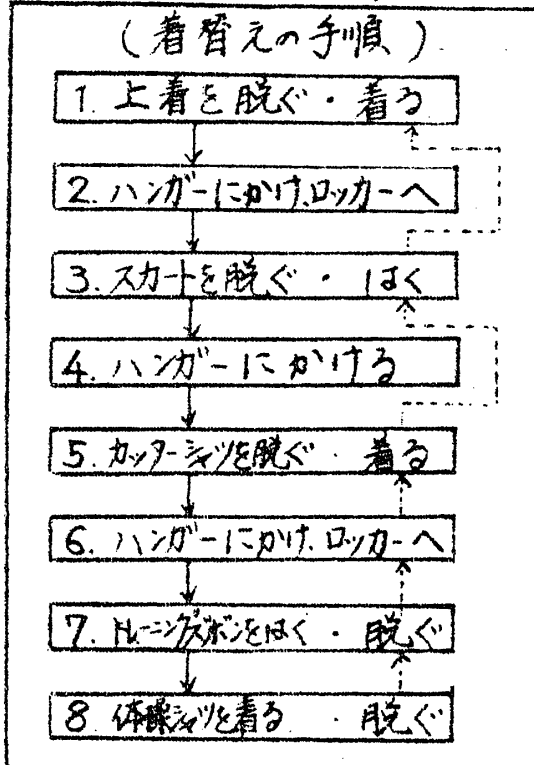
(基本的な生活習慣に関する奥態)

検査結果や日常生活の観察から、身辺処理が一人でできるようになることが、発達レベルが2~3才児程度のH子(以後H・M児をH子とする)にとって何よりも大切なことではないかと考えた。そして、残された比較的高い能力の開発に着目し、手の運動の発達と基本的な生活習慣の確立を旨として、まず衣服の着脱の自立と取り組むことに

項目	介助(援助)	自立
洗面	ほとんど介助	
歯みがき	みがき残し放置	口ゆすぎ
手洗い	石けん使用時の洗い方	
入浴	ほとんど介助	
排泄	大便時の後始末 生理時のきき	小便時
食事	口に入れ量の調節 食種の調節	はし、スプーンを使って食べる
衣服の着脱	表裏前後左右の判断 衣服のすそへの結束	
整理・整頓	ほとんど介助	

した。その大きな理由として、一日の生活の流れの中で指導の機会が多いこと（登下校時の着替え、作業着への着替え、トイレ時夏の水泳時など）があげられる。

### 3. 指導への取り組み



け子は着替えのしつしつの技能をとって見れば、どうにか一人でできるものの、手順よく着替えることはできなかった。そこで、自分で衣服の着脱ができるようになるためには、次にすべき行動の見通しがたっていないなければならないと考え、左表のように着替えの手順をパターン化し、反復練習により定着させようとマンツーマンで指導に取り組んだ。その際、次の点に留意した。

(1) 他の生徒と重ならないよう時間帯をずらす。

- (2) ロッカーの場所を覚えやすい、着替えやすい位置にする。
- (3) スカート・カッターシャツを同じハンガーに、上着は別のハンガーにかけたせる。
- (4) け子の現段階の能力では無理だと思われることは手伝う。
  - ・ 前後左右、表裏の判断
  - ・ ハンガーにかける際の上着などの持ち方
  - ・ カッターシャツの第一ボタンのとめはずし
  - ・ スボン・スカートをはいた時の下着等のすそ処理（特に後ろ）

### 4. 指導の実際

指導にあたっては、「できる限り待つ」という姿勢で臨んだ。また、次第に口頭指示を少なくしていき、介助も少しずつ控えるようにして指導してきた。特に、10月以降、け子が歌を歌ったり聞いたりするのを好むことから、口頭指示を即興の歌によって与える試みもした。その結果、所要時間の短縮がみられた。け子の4月よりの着替えにおける変化は、次の表に示した通りである。

(け子の着替えにおける変化)

項目	手だて 変化	手だて	け子の変化	
			4月	12月
ロッカーの位置		ロッカー扉にはついている鎖と鍵かけから指さしたことを強調して名札に注目させる。	誰かれのところかわからず、近くのロッカーを次々とあけていた。	間違えることなく自分のロッカーのところへ行くようになった。
上着	脱ぐ	手を添えてボタンを指先でつかませる。	前身頃を引はるよりにしてボタンをはずしていくことが多かった。	いつ指先を使ってはずすことが見られだした。
	ハンガーにかける	服の表を手前にし肩に逆い衿のところが両手で持たせ(仰助)、ハンガーにかける。	上着のどの部分をハンガーにかけてよいかわからず、にがけるのですぐに落ちてしまっていた。	肩の部分が正しくハンガーにかかるところまではいかないが、落ちないようにかけることができた。
	着る	服の表が手前になるように肩に逆い衿のところが両手で持たせる。	表裏左右の区別がつかないため、袖に手が正しく通らなかつたり、上下が逆さになったりして着られなかった。	ほぼ失敗することなく袖に手が通るようになりボタン・スナップも一人でとめることができた。
スカート	脱ぐ		ホック・スナップをはずしサスペンダーを肩からはずして脱ぐことができた。	→
	ハンガーにかける	両手にサスペンダーを一本ずつ持たせハンガーの両側からかける。	ハンガーの片側に二本ともかけてしまい、バランスがとれず落ちることが多かった。	両手にサスペンダーを一本ずつ持つようになりかける時両手でおさえてかけるようになった。
	はく	両手にサスペンダーを一本ずつ持たせ、足からはかせる。	踵からかぶってほくのでサスペンダーの位置が左右の一方に片寄り着るのに回舌八番することがよくあった。	バランスをうまくとりながら足を入れるとサスペンダーを持ち上げるようにしてスカートをほき、ホック・スナップも自分でとめられるようになった。
カッターシャツ	脱ぐ	一番上と二番目のボタンだけはずしておく。徐々にできない時のみ手伝うようにしていく。	一番目と二番目以外のボタンは自分ではずせ、脱ぐことができたが、袖が裏返っていることが多く、後始末に苦労した。	二番目のボタンもはずせてだし、一番目のボタンも時々自分ではずすことができた。袖口を持つのに指示がなお必要。
	ハンガーにかける	上着の場合と同じ	カッターシャツのどの部分をハンガーにかけてよいかわからず、にがけるのですぐに落ちてしまっていた。	上着より生地が薄いので、さかむとかけることはかなり難しいが、どうにかかけることができた。
	着る	<ul style="list-style-type: none"> <li>上着の場合と着方は同じ</li> <li>一番上のボタンは教師がこめる</li> <li>腕や袖がぬじれたらすぐ元に戻し、肩に近い位置でスナップのきかせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表裏左右の区別がつかないため袖に手が正しく通らなかつた。</li> <li>一番上のボタンははめられるが、他のボタンはボタン次と対応できなかった。</li> <li>袖口を正しくかまることができなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほぼ失敗することなく袖に正しく通らした。</li> <li>第一ボタンははめられるが、他のボタンはボタン次と対応しないことがある。</li> <li>早い時には、のりもかからずスナップもとめられた。</li> </ul>

トレーニングズボン	脱ぐ	裏返しているところを示し、指示をしながら手を添えて、裾をむかせる。	自分で脱ぐことはできたが、裏返したまのことが多かった。	裏返すところを示されれば、自分で裏返せるようになった。
	はく	両脇の白い線を目印に「白い線」と言いながら指さし、そこを持って（は）くせる。	片方に両足を入れてはいていることがよく見られた。	白い線がどれかわからず、指示されれば、やはり確実に持ち、はくがうになった。
体操シャツ	脱ぐ	袖口を持って引くようにして腕をぬかせる。	自分で脱ぐことはできたが、袖が裏返したままであった。	指示があれば、自分から袖口を持って脱ぐのようになった。
	着る	ポケットと校章を目印にし、校章のついた方を下にし、裾を持たせ、手から着させる。	頭からかぶるための前後と正しく持たせても左右の手のか差から、シャツがまわり、後ろ前に着たり、袖に頭が入ることがよくあった。	手を先に通し、上手に正しく着ることができ、正しく、前後の判断はできない。

## 5. 考察

4月当初、30分～40分かかっていたH子の着脱も、日を迫うごとに少しずつ短縮され、現在は、15～20分程度でできるようになった。手順や要領を覚えてきたこと、しつしつの技能が確実になってきたことがその要因であろう。このH子の指導を通して、さらに次のような考察を得た。

- (1) 手順や要領、技能を定着させるためには、一貫した指導方法で、パターン化した指導内容を反復練習することが大切である。
- (2) 「自分一人でする」という態度を育てるためには、指導者サイドの「できる限り待つ」という姿勢が大きく影響すると思われる。
- (3) 家庭との連携指導は、必要不可欠なポイントである。
- (4) 行動が体調や外的刺激に左右される場合、それを最小限度にとどめる配慮が必要である。

## 6. 今後の課題

今まで述べてきたようにH子の衣服の着脱の自立を目指して指導に取り組んできたが、これから先、H子が一人で衣服の着脱ができるようになることはかなり難しいことと思われる。しかし、反復練習し、指導することにより、できることをしつと増やし、生活に幅を持たせることが、次の能力を高めることにつながっていくのではないだろうか。今後も、体調に気をつけ、少しでも集中力をつける工夫をしながら、この指導を継続していきたい。